

□8月10日説教(隅野徹牧師)短縮版 「平和の道を知る」(イザヤ書59:1～21)

今日の中心箇所として、わたしは15節から16節の文を挙げます。「主は正義の行われていないことを見られた。それは主の御目に悪と映った。主は人ひとりいないのを見、執り成す人がいないのを驚かれた。」「とりなす」とは、ここでは神と人との仲立ちをするという意味です。しかしこのイザヤ書59章の預言がなされた時、神と人々の間をとりなす人がいなかった、そんな状況を神は驚かれたのだという預言がなされます。これは開いた口が塞がらないといった感じの、悪い驚きを表す言葉です。人間はすべて神によって創造されたものですが、その人間の中で神を愛し、隣人を愛し、その両方の仲立ちをしようと志す者がいかに少ないか。私たち自身が神と人々との執り成し手になっていないという事実を、謙虚に受け止めたいと思います。一人でも多くの人が謙虚な思いで、神と世界の人々との執り成し手にならせていただきたいという思いを持つなら、世界は少しでも平和な方向へ変わると信じています。

さて、執り成し手がないことを驚かれた神が、そのまま何もされなかったのかというと、そうではありません。59章16節の続く言葉には「主の救いは主の御腕により、主を支えるのは主の恵みの御業」と預言されています。これは悔い改めようともしない罪人をも、神ご自身が一方的にあわれんでくださる、という意味だと私は考えます。この言葉の救いの業は、神の独り子イエス・キリストによって成就したと、新約時代を生きる私たちは受け止めます。とくに最後の21節は、罪深い私たちが、それでもとこしえに神とともにいることができる約束が見て取れます。これはイエス・キリストの十字架と復活があればこそ、成し遂げられる約束であることは間違いありません。

神に背き、そして互いに憎しみ合い殺し合うような人間と、創造主である神とを執り成すために、神自ら独り子キリストを送って下さった、そのメッセージが今日の箇所イザヤ書59章には溢れています。私たちはその執り成し手に感謝しつつ、自らも神と人々との執り成し手として、祈りつつ歩むことが大切ではないでしょうか。多くの執り成し手の存在が、分断と対立が深まるこの世界を変えることを期待し祈ります。(終)